

『40代松澤』、初の国際大会

松澤俊行

アジア選手権大会 2014年9月 カザフスタン国

9月、道場主はカザフスタンに遠征し、日本代表選手としてアジア選手権（A s O C）に出場した。遠征中と、遠征後に考えたこととは…。

気分は「初舞台」

自身にとって、今年のアジア選手権は、2年ぶりの国際選手権大会出場の日でした。前回の海外遠征は、2012年の世界選手権。その時の年齢は39歳（と10ヶ月）でしたので、今回は40歳の区切りを越えてから、初の「国際舞台」「日本代表戦」だったわけです。

通算の経験では、今回のチームではトップだった一方で、「国際大会から長く遠ざかっている」という点でもチーム一でした。その状況は冷静に受け止めなければ、と考えました。「過去の成功体験は当てにならない。この年齢になれば尚更」と自分に言い聞かせ、決して楽観せず、まずはチームメイトにしっかり付いて行くことを目標に、大会が進むにつれて勘を戻し、調子を上げ、そしてリレーでピークを迎える、という計画でした。

遠征の一ヶ月前、体調不良に陥り、通院をしました。振り返れば、4月から仕事の量、内容、ペースに少し変化が起こった影響、つまりは身体的疲労や精神的ストレスの蓄積があったかもしれません。そこで準備がいささか停滞したことは否めませんでした。前号に記したように「体調の良い日など、そうそうない」という覚悟(?)は常にあるため、慌てずに、そして決して無理をせず、9月を迎えるつもりでいました。

幸い、通院を終えた8月中旬以降は、参加した大会や合宿で復調傾向にあることを確認でき、「間に合った」という感覚が持てるようになりました。今回の遠征先は、中央アジアという初めて向かう地域で、そのことに対する不安も正直ありましたが、「初遠征のような緊張と興奮を感じている。そのことがプラスになるかも」とも思い、徐々に今回の「挑戦」が楽しみになってきました。

チームメイトから1日遅れて現地入りすることになっていた（仕事の関係で、早期に計画を立て、航空券を手配したところ、チーム本隊の行動と少しずれてしまった）ため、最終調整とし

て出国前日の9月13日（土）に「山स्प」スプリントにも出場しました。そこで優勝することができ、さらに遠征への、そして自分自身への期待を高めました。

「厳しい現実」には慣れていても

少々不安があったカザフスタン到着後の移動とチームへの合流も、空港への出迎えから始まった現地関係者の、愛想はないもののぬかりもない、必要十分なお世話があって、無事に行えました。入国5時間後には、本戦トレイン付近で行われたモデルイベントへ。レース直前に必要な地図、トレイン、自分の調子の確認も無難に終わりました。翌日は第一種目のスプリント。クラス内トップスタートとなり、そのことも「全日本大会（3位を獲得）と同じ」と、前向きにとらえられました。

終盤、柵の内側のコントロールへスムーズにアタックできず、10～15秒のロスがあった場所以外は大きなミスは自覚がない、無難なレースを終え、結果を待ちました。すると、次第に日本選手を含む上位を争う選手たちとのスピード差を思い知らされることとなりました。フィニッシュ後、チームメイトが口々に「世界選手権ほどトリッキーではない」「難しくない」「アジア選手権としては手頃」と言っており、大いに領けたものの、レース中は警戒心が先に立って、追い込み切れなかったことが反省されました。

続くロングも、距離（15km超）と仕上がり状態を考えると慎重にならざるを得ず、結局似たようなレース運びをし、似たようなレース後の状況となりました。106分台（ちょうどキロ当たり7分ほど）で、「まずまずじゃないか」と思っていたところ、チームメイトがキロ当たり6分の90分前後で走ったことを知り、落胆というよりも無力感を覚えました。このレースの後、男子7選手の中から2チーム6人が出走することになっていた3日後のリレーのメンバーから漏れることが決定。「最も重視していたはずのリレーを走れないとは」と、無力感と共に脱力感にも襲われました。



スプリントコースのスタート付近と終盤。この施設（森と湖に囲まれた保養施設）は日本チームをはじめ、多くのチームの宿舎となっていた。コントロール設置前に選手は柵の東側へ隔離されている。



ロングコースのコントロールの一つ。岩が密集したエリアは1：15000図では読みにくいいため、同一マップ内に拡大図が示されている。このことは事前に知らされていたが、地図を折って拡大図の存在に気付かない選手も多数いた。(1：15000図でもさほどの難なくアタックできるコントロール位置だった、ということもある。)

松澤俊行 アジア選手権成績
(開催順に記載)

スプリント

16分05秒3 13位
トップと2分21秒9差
日本男子7人中6番目
日本人トップは尾崎弘和選手
(14分12秒1 3位入賞)

ロング

106分45秒 13位
トップと22分01秒差
日本男子7人中6番目
日本人トップは小泉成行選手
(89分00秒 2位入賞)

ミドル

40分21秒 16位
トップと8分39秒差
日本男子7人中6番目
日本人トップは尾崎弘和選手
(32分43秒2位入賞)

<参考:大会公式ウェブサイト>

<http://www.orienteering.lik.kz/4th-asian-kaz>
他の選手の成績も確認できます。

苦いレース経験

シーズン中、連続的に数多くの試合をこなすプロ野球選手は、「すぐに次の試合がやって来るのだから、失敗にいちいち落ち込んでいられない」と言います。全個人種目に出場することになって今回のアジア選手権も同様で、中1日あったとはいえ、「次」のミドルはすぐにやってくる。落ち込んだり、萎縮したりしてもいられません。とはいえ、なかった力が急に付くわけでもありません。「力が付くことはないとしても、力が落ちるわけでもない。連戦で勘が磨かれている分、一戦一戦内容は良くなっていくはず」と、自分に言い聞かせて、間の時間を過ごしていました。

42歳として迎える初の試合、アジア選手権ミドル。「前の2レースより、もう少しプッシュする」ことを心掛けてレースに臨みました。オーバーランしてもスピードを維持しながら現在地を把握し直して機敏に復帰する、といったミスやミス後の対処も含めて序盤は「まずまずイメージ通り」でした。しかし、中盤に読図の甘さによるアタックミスが出て、さらにはマップアウトもする始末。今回の滞在中、自分にとって「最後の選手権レース」は、随分と苦いものになりました。



今回のアジア選手権のモデルマップ。大胆(?)にも、ミドル、リレーのフィニッシュ地区はモデルのフィニッシュ地区と同じで、この図の範囲に(つまりモデルコントロールのすぐそばに)置かれたコントロールがいくつもあった。

思いを最後までぶつけ切る

アジア選手権、残る会期の2日間はリレーシリーズ。フォレスト（森）での男女別3人リレーと、スプリントの男女混合4人制リレー。どちらもメンバー入りしていない自分は、併設クラスに回ります。昨日まで同じ行動を取っていた「代表」たちと、別の時間帯で行動することにやりきれなさを感じないでもありませんが、当初からこのタイミングでピークに持って行くことを目指していたわけですから、悔いのないように自分をぶつけ切ろう、と考えました。

結果を見ると、コースは違えど（一部共通ログあり）、両日とも代表たちと遜色ないペースのオリエンテーリングができていました。そのことがチームに何かの影響を及ぼしたとは思えません（実際、筆者のタイムに対するチーム関係者の関心が、選手権に出た3日間と大きく変わったことを2日間で痛感しました）が、自分自身の「今後」を考える上では大いに意味を持つものとなりました。

気分はいつも「最後」だけど

初の代表入りをするまでは「代表にならずに終わる可能性もある」と、そして代表入りしてからは「これが最後の代表戦になるかもしれない」と、国際大会には誇りと共に、常に危機感を持って臨んでいました。（もちろん、数年に渡る中長期計画を立てる上で、継続的な代表入りを「仮定」することはありますが。）年齢を経れば経るほど、それが「現実」になる可能性が高まりますし、若い頃には「その状況は耐えがたいものになるのではないか」と恐れる気持ちもありました。

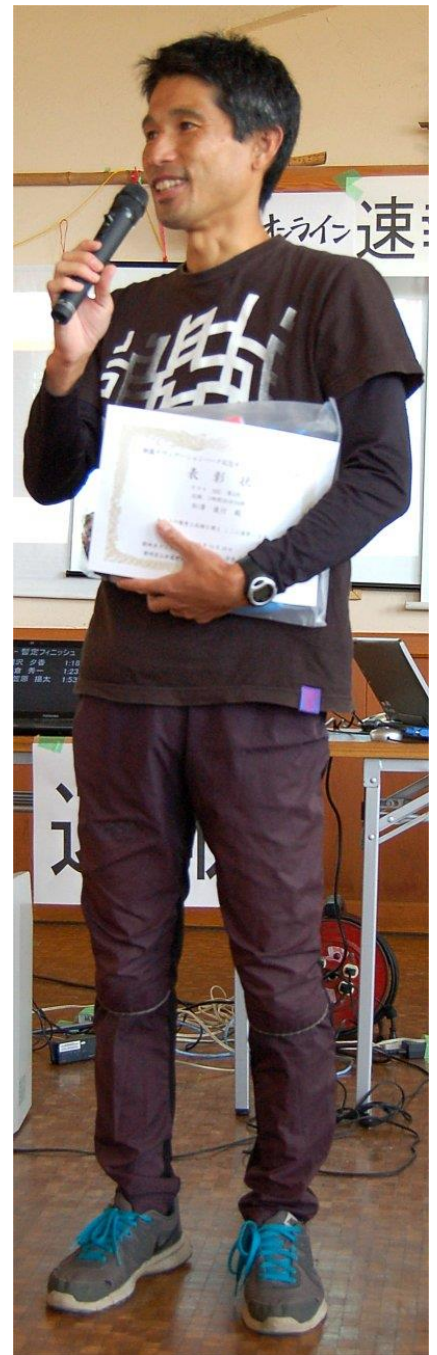
でも、最近は「これが最後の『闘える』『良い勝負ができる』『勝つ』チャンスになる可能性があるのだから、『今尽くせる全力』を存分に尽くそう」という感覚が、心地良く思えることもありますし、この感覚をいつまで持ち続けられるか、恐れ以上に興味があります。そして、アジア選手権に対しても、「『次』を最後のアジアチャンピオン獲得のチャンスと考えて、目指したい」という気持ちになっています。

10月には、自身にとってアジア選手権後初の公認大会となる「朝霧記念大会」に出場しました。そこで心掛けたのは、アジア選手権遠征後半のように「スピードを維持するために、遠くの目標を目指す。手前でうろつくぐらいなら、コントロールの向こう側の目立つ場所に速やかに行って再アタックす

る。決して足を止めない」ということでした。その戦略が功を奏し、3位を獲得できました。

この日、優勝したのは「アジアの尾崎」選手、2位は「中年の星・鹿島田」選手。この2人と共に表彰を受けることに喜びを感じつつも「尾崎選手と比べたら自分は遅い。鹿島田選手と比べたら自分は粗い」と、悔しさも感じていました。今、速さや精密さでこの2人をはじめとする現在の日本上位陣に迫るべく、「焦燥感や悲愴感よりも、挑戦心や好奇心を前面に押し出しながら競技を続けて行きたい」という気持ちを新たにしています。

（松澤俊行）



<松澤俊行プロフィール>

1972年9月静岡県生まれ。

日本代表選手として、世界選手権に11回出場。9月のアジア選手権(AsOC)で、2年ぶりの国際選手権大会復帰を果たした。そのアジア選手権大会期間中に、満42歳の誕生日を迎えた。この先、上位戦線に復帰できるか、秋冬の闘いぶりが注目される。